

# 「あ！萌え」の構造

(番外編)

- 君の臍臓をたべたい -

総合心理学部 齋藤清二

今回は、番外編で、私が以前から気になっていた小説であり、つい最近観た映画でもある『君の臍臓(すいぞう)がたべたい』について考察する。

なんで、私がこの作品が気になっていたかという、やはり何ととってもそのタイトルである。実は私は、もともとは消化器が専門の内科医で、特にその中でも臍臓の専門家だったのである。

「え、齋藤さん、“消火器”の専門家だったんですか、じゃあ消防署のほうにお勤めだったんですね？」なんて勘違いしているそこのキミ！ 消火器ではなくて消化器だよ！消化器。消化

器ってなんだか知っているかい？ 人間の内臓だよ、内臓。え、「そんなこと知らナイゾウ」って、なんだよ。ところで、消化器の内臓にも種類がいくつもあるわけなんだけど、あなた、どんな臓器知っているかな？「そんなの知ってますよ。えーと、食道でしょ、胃でしょ、腸でしょ、肝臓でしょ、胆嚢でしょ、それにそう、今話に出ていた臍臓ですね。それくらい知ってますよ。ほら昔から、うまいお酒を飲むと『五臓六腑にしみわたる』なんていうじゃあないですか」

そうそう、えらいえらい。よく知っているね。ところが、今キミが言った

「五臓六腑」の中には膵臓という臓器はない。昔の人は死んだ人を解剖して、人体の中がどうなっているかを知りたがったけれど、今と違って、死体をホルマリンに漬けておくことで保存したりできなかった。膵臓は人が死ぬとすぐに自分で自分を消化してしまい、溶けてまわりの脂肪組織と区別がつかなくなってしまう。だから昔の人は膵臓という臓器があることを知らなかった。そのくらい「膵臓」はマイナーで目立たない臓器なんだよ。

話を戻したい。私が医者になって初期研修を修了し、消化器内科医を志した時、さらなる下位専門領域として「膵臓」を選択したのは、特に深い意味は無かった。たまたま、研修病院の指導医の先生方の中に、その頃最新の膵臓の検査法の第一人者の方がおられたということと、肝臓や胃などのメジャーな臓器の専門家はたくさんいるのに、膵臓を専門とする医師は珍しかったということが主な理由だった。医者になって、大学病院に勤め、一応専門を標榜するようになって、結局のところ大学病院を辞するまで、私は消化器内科で「膵臓外来」を担当していた。20年くらい前に私が書いた膵臓についての文章の冒頭を紹介しよう。同じようなことが書いてある。

ご存じの方も多いと思うが、膵臓や、膵臓疾患というのは、消化器のうちでもかなりマイナーな分野である。一般には、膵臓が身体のどこにあるか、よく知らないという人も多いのではないだろうか？一方では、

膵臓疾患に関する診断法というのもあまり進歩しておらず、膵臓病は得体が知れないという印象を持たれていた。一方で、膵臓癌は、あらゆる悪性腫瘍のうちでももっとも予後が悪い（5年生存率が未だに5%前後である）ことが知られている。そのため、膵臓の病気というと、得体の知れない上に、何かやっかいそうな病気であるという印象が、一般の人のみならず、医師の間にもあったのではないかと想像される。

さて、教科書的には、膵臓の病気といえば、有名なものは、膵臓癌（これは前述のようにたいへん予後が悪い）、慢性膵炎（これは、ほとんどアルコールが原因なのだが、アルコールをやめないかぎり予後は良くない）と、聞いただけで、気が重くなりそうなものばかりである。家庭医学書などで、膵臓病のページをめくると、まさに気が滅入ること請け合いである。しかし、実際には、膵臓疾患を疑われる人は、必ずしもそんなはっきりした疾患をもっているとは限らないのだ。そういう患者さんのひとりが、次に述べるAさんである…。

（斎藤清二・岸本寛史：『ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践』，2003，p230-249.）

ところで、上記の文章はもともと、「慢性膵炎疑診例における心身相関的悪循環」というタイトルの論文のために書かれたものである。手短にいうと、慢性の膵臓病だと思われている病気の中に、実は膵臓そのものは悪くないという病態がある。医者も本人も膵臓が悪いと思いついでいるし、そう思いこむのも無理が無いような、症状、徴候、

検査所見、病状の経過が実際にあるのだ。しかし、「膵臓そのもの」には悪いところはない。それが「慢性膵炎疑診例」と言われる状態であることを提案しようとした。その論文は「日本膵臓学会」の機関誌に投稿したのだが、もののみごとに不採用になった。「私たちの学会誌は『膵臓』についての学術誌であって、あなたの論文は『膵臓の病気ではないもの』についてのものですから、領域が違っています。別の領域の学術誌に投稿をお勧めします」というのが解答だった。

話は少し変わるが、医師になってから15年くらいたったところで、私は心身医学とか臨床心理学とかいう学問に興味を抱くようになり、色々なトレーニングを受けた結果、だんだんそちらのほうが専門になってきた。膵臓についての診療や研究は、医者になって25年くらいたったところで、ほぼ終止符をうった。それ以後の私は、自分が膵臓が専門だということを他人にアピールすることはほとんどなくなっていた。

ある時、深層心理学を専門にされている精神科医の先生と話をする機会があって、あれこれ話しているうちに、私のもともとの専門が消化器内科医でさらに膵臓であるということをお話したら、その先生、こう言われたのである。

「そうですか。膵臓ですか。やっぱりね。私はそうではないかと思っていたのですよ。膵臓は無意識の一番深いところにある臓器ですから…」

私はそれを聴いて、「訳が分からない」と思った（分かる人がいたら教えてほしい）。しかし、なんとなくその先生の言葉は頭の片隅にずっと残っていた。

それで、今回の「君の膵臓をたべたい」である。どう考えても小説のタイトルとしては、奇抜の域を乗り越している。初めて目にしたのがいつ頃だったかはっきり覚えていないが、おそらく発売後1年くらいたって、数十万部の売り上げが記録された頃だったと思う。その時は、本屋で見かけただけで、中身は見なかったのだが、「なんだ、このタイトルは??」と思ったことは確かである。…で、2017年8月現在、小説の売り上げは、200万部を超えているという。に、200万部！

ちなみに、「膵臓」というキーワードでググると、1200万件ほどがヒットする。その上位はほとんどが医学関連の記事であるが、グーグル先生の2ページにはすでに『君の膵臓を食べたい』の記事が出てくる（検索しているのが私だからかもしれないが）。「膵臓 and 小説」で検索すると、452000件がヒットして、20頁くらいまで眺めてみたが、『君の膵臓がたべたい』以外の作品はみあたらず、おそらく小説のタイトルに「膵臓」という文字がはいっているのは前例がないのではないかと思う（英語でpancreasという単語の入った小説があるのかどうかは知らない）。

もちろん、この大ヒットがタイトルのせいだけということは言えないが、

もしこの作品が『君と僕の物語』とか『愛と死を煮詰めて』などという、ありふれたタイトルだったら、おそらくここまでは売れなかったのではないだろうか。それでは私が、『サルでも分かる膵臓の病気』というようなタイトルの医学書を出版したとしたら、おそらく500部も売れないだろう（自信を持って言える）。ちなみに「斎藤清二 and 膵臓」でググったら、ヒット件数は472だった（←それが何か？）。

さて、グダグダ言っていてもしかたがないので、この『君の膵臓がたべたい』がなぜここまで多くの人の心を捉えているのかについて、いくつかのポイントに絞って考察してみたい。それが、なぜ「あ！萌え」の構造というテーマと関係しているかということ、それは、「多くの人が関心をもっている」という事実自体が、なんらかの普遍的な「魅惑する、されるという現象」に関連している可能性があり、それは「萌え」という現象となんらかの関係にあると推定されるからである。

考察の素材は、『君の膵臓がたべたい』の原作小説（2015年6月、双葉社より発行、文庫版は2017年4月発行。引用の頁数は文庫版による）、および2017年7月に公開された実写版映画『君の膵臓がたべたい』の内容による。ただし、ネタバレを防ぐため、ストーリーの重要な場面については最小限にしか触れない。

何度も述べてきたように、何と言っても本作品でもっとも印象深いのは、タイトルとなっている「君の膵臓を食

べたい」という言葉である。この言葉は、全体のストーリーの中で、数回にわたって登場している。ストーリーにおける時間順にいうと、最初にこの言葉が出現するのは、同級生の「山内桜良（やまうち・さくら）」が図書室で「僕」に発する「告白」においてである。「僕」は、それまで話したこともなかった同級生の桜良が偶然病院の待合に置き忘れた「共病文庫」と題されたノートを見てしまい、桜良が“膵臓の病気”で余命約1年であることを知る。その後、この秘密を共有する唯一の友人である「僕」との時間を共有するために図書委員になった桜良は、「僕」に唐突にこの言葉を投げかける。

桜良「君の膵臓を食べたい」

僕「いきなりカニバリズムに目覚めたの？」

桜良「昨日テレビで見たんだあ、昔の人はどこか悪いところがあると、他の動物のその部分を食べたんだって」

僕「それが？」

桜良「肝臓が悪かったら肝臓を食べて、胃が悪かったら胃を食べてって、そうしたら病気が治るって信じられてたらしいよ。だから私は、君の膵臓を食べたい」

僕「もしかして、その君っていうのは僕のこと？」

桜良「他に？」

（文庫版 p5-6）

この会話は、終始ブラックジョーク

のような雰囲気の中で進められる。もちろんこの小説は基本的にエンターテインメントであるから、医学的なリアリティに正確さが求められるわけではない。実際、「僕」が偶然知ってしまった桜良の致命的な膵臓の病気は、現実のどのような膵臓疾患にも当てはまらない。その膵臓病は、余命だけはしっかりと分かるのだが、日常生活には全くといって良いほど影響を与えないという設定になっている。これは「この10年くらいの医学の進歩のおかげ」なのだそうだ。ここには常識的な「病いの物語」は存在していない。

しかし、上記の「君の膵臓を食べたい」というメッセージは、あきらかに私たちが“ぞっと”させるような何かを含んでいる。私たちが毎日を過ごしている日常の世界とは異質な、恐怖とも恐れとも言えるような“背筋がぞくぞくするような感じ”が、この表現には含まれている。それはおぞましきとか嫌悪とかを誘発するネガティブな側面と、だからこそそこに目を向けざるを得ないような、複雑な感情を誘発し、私たちがそこから「距離を置く」ことを難しくする。

このような身体を巻き込むような呪縛の力から距離を置くために、最も有効な方法は「それに言葉を与えて合理化すること」である。「僕」が「カニバリズム」という「学術用語」を用いて、「膵臓を食べたい」という言葉を合理的に、還元的に説明し、その呪術的な力を中和させようとしたのはそのためだろう。それに引き続く桜良の説

明も、「膵臓を食べる」という言葉の呪術的な効果を弱めることに協力しているように見える。二人は互いに協力しながら、この恐ろしい力と距離を保ちながら、一方でその話題から離れないまま会話を続けるという難しい作業を遂行しているように見える。

桜良が説明している「病気になったら、同種のものを取り込むことで病気を癒やす」という原理は、同種医療（ホメオパシー）の原理として、医療の歴史の中で脈々と生き続けているものである。それは近代まで、むしろ医学の原理としては中心的でさえあった。この原理はもちろん現代の科学的な医学においては、異端とか迷信として退けられてはいるが、実は現代の医療にも姿を変えながら頻りに姿を見せるものである。私が研修医の頃、「肝機能障害」に効果があるとして頻りに使われていた「プロヘパール」という薬剤は、動物の肝臓の水解物（つまり、ホルモンのレバーを水煮にして、出汁を煮詰めて乾燥して丸薬にしたようなもの）だった。この薬は2017年に製造中止になるまで保険収載されていた。

小説の中で、次に「膵臓を食べる」ということが話題になるシーンは、なんと、「僕」が桜良に強引に誘われて、焼き肉と一緒に食べるシーンである。桜良は「私、好物を訊かれたホルモンって答えるよ。好きなもの、内臓！」と断言し、動物の内臓をむしゃむしゃと食べる。ここでの会話である。

桜良「私、火葬は嫌なんだよね」

僕「なんだって？」  
桜良「だから、火葬は嫌なの。死んだ後に」  
僕「それ、焼き肉食べながらする話？」  
桜良「この世界から本当にいなくなっちゃみたいじゃん。皆に食べてもらうとか無理なのかな」  
僕「肉を食べながら死体処理の話はやめにしよう」  
桜良「臍臓は君が食べてもいいよ」  
僕「聞いてる？」  
桜良「人に食べてもらおうと魂がその人の中で生き続けるっていう信仰も外国にあるらしいよ。無理かな？」  
僕「無理だろうね。倫理的に。法律的にどうかは調べてみないと分からないけれど」  
桜良「そっかー残念。君に臍臓はあげられないね」  
僕「いらないよ」  
桜良「食べたくないの？」  
僕「君は臍臓のせいで死んでいくんじゃないか。きっと君の魂の欠片が一番残ってる。君の魂はととも騒がしそうだ」  
桜良「確かに」

(文庫版 p31-32)

これらの会話の深層の意味は、一種のブラックジョークの文脈に置かれることによって隠蔽されている。しかし、多くの読者は、このようなやりとりに嫌悪や気持ちの悪さのほうを感じるかもしれない。実際にこの場面は映画では省略されている。ここでは、他者に

よって食べられるという行為が、死後の魂が他者の中で生き続けるという、少し違った意味での呪術的思考と結びついている。これはまさに「カニバリズム」を支えている思考でもある。食べるものは、食べられるもの特質を自分の中に取り込み、それは優れた他者の特質を自分の中に取り込むことによって、自分をより優れたものへと変容させる行為なのである。

もしあなたが勇気ある戦士になりたかったら、より優秀な戦士の心臓を取り出して食べるのがよい。なぜならば心臓は「強い心」の象徴であるから。もしあなたが賢しこさと徳を兼ね備えた賢者になりたかったら、より賢い人の脳を取り出して食べるのがよい。なぜならば脳は「思考能力」や「賢慮＝徳」の象徴であるから。もしかすると、織田信長が姉川の合戦の後で、浅井長政と朝倉義景の髑髏に酒をついで飲み干したのは、両武将を貶める行為ではなくて、むしろ尊敬を表現する呪術的行為だったのかも知れない。

しかし、ここまで話題にされた「他者の能力の象徴としての内臓を食べる」「他者の中で魂が生き続けるために食べられる」といった類感呪術的な原理は、「桜良」と「僕」の関係におけるドラマの出発点に過ぎない。もし「自分の病気を治すためにそれと同じものを摂取する」というだけであれば、それは「君の」内臓である必要はない。普遍的な呪術的行為が個人的な世界で意味をもつためには、「君」と「僕」の関係が決定的な役割を果たす。ここ

で要求されていることは、普遍的に成り立つ集合的な世界の原理と「個別化」の原理をストーリーの中で結びあわせていくことだろう。

このストーリーの最終場面で、最も印象的な形で「君の臍臓を食べたい」という言葉が現れてくる。結論を急ぐと、いくつかの印象的な交流を経て「僕」は、「桜良」が自分とは正反対の、徹頭徹尾「凄い人」だということをはっきりと自覚する

そもそも彼女の凄いところは、彼女の人的魅力的の多くが、彼女の余命とはまるで関係のないものであるということだ。きっと、彼女はずっとああだった。そりゃあ少しずつ思想は練り固められ、言葉は豊かさを増したろうけど、でも根幹はきっと彼女が一年後に死のうが死ぬまいが関係がなかったんだろう。彼女は、彼女のままで凄い。それが、僕は本当に凄いと思う。…「僕は本当は君になりたかった」人に認められる人間に、人に認められる人間に。人を愛せる人間に、人に愛される人間に…彼女に贈るのに、これ以上びったりな言葉はない。僕は、渾身の言葉を、彼女の携帯電話に向かって送信した。僕は…「君の臍臓を食べたい」

(文庫版 p251-252)

そして、「僕」が君によって完全に変えられてしまったことを自覚した瞬間、それはまさに「歓喜」の瞬間であったのだが、ストーリーは急展開を見

せる（ここはネタバレになるので書かない）。では桜良のほうから見るとどうだったのか、それを「僕」は後に桜良からの手紙で知ることになる（映画では12年後のできごとということになっている）。

私の人生は、周りにいつも誰かがいてくれることが前提だった。ある時気づいたの。私の魅力は、私の周りにいる誰かがいないと成立しないって…誰かと比べられて、自分を比べて、初めて自分を見つけられる。それが、「私にとっての生きるってこと」。だけど君は、君だけはいつも自分自身だった。君は人との関わりじゃなくて、自分を見つめて魅力を創り出してた。私も、自分だけの魅力を持ちたかった…だからあの日、君が帰ったあと、私は泣いたの。初めて私は、私自身として、必要とされてるって知ったの。初めて私は、自分がたった一人の私であるって思えたの。ありがとう…そんなありふれた言葉じゃだめだよ。私と君との関係は、そんなどこにでもある言葉で表すのはもったいない。そうだね、君は嫌がるかも知れないけどさ。私はやっぱり。君の臍臓を食べたい。

(文庫版 p290-293)

ここで、解釈めいたことを書くのは、まさに野暮というものだろうと思う。「君の臍臓を食べたい」という言葉は、まさに正反対の性質（ユングならそれを内向 introvert と外向 extrovert と呼

ぶだろう)をもつ人間である二人から同時に発せられた「私は君になりたい。

(全く正反対の)存在を取り込むことによって根本的に変わりたい。二つで一つの全体になりたい」ということの意味であることが分かる。それは「恋人である」というようなレベルに還元できるようなことではないし、「君を愛している」ということとも違う。それを表現するためには、まさに「普通の言葉」とは全く違う言葉を必要とする。それが「君の膵臓を食べたい」という言葉である。

しかし、最後にしつこいようだが、なぜ「膵臓」でなければならないのだろうか？これについては、実はこのストーリーの中ではほとんど全く言及されていないし、作者が果たして意識して「膵臓」を選んだのかどうかもはっきりしない。(ストーリーの中では、「偶然のようにみえるものは、全て選択されたものである」という(作者の?)思想が随所に述べられているので、おそらく膵臓が選択されたことについても、同じように説明されるのだろう)。

小説の中で、膵臓について説明されている箇所は、以下の部分だけである。

「膵臓は、消化と、エネルギー生産の調整役だ。例えば糖をエネルギーに変えるためにインスリンを作ってる。もし膵臓がないと、人はエネルギーを得られなくて死ぬ。だから君に膵臓をご馳走することはできないんだ。ごめんね」

上記の説明は、現代の医学の状況のもとでは正確ではない(例え膵臓が全て摘出されても、ヒトはそれだけですぐ死ぬわけではない)。作者がそれを意識してわざと書いているのか、それともあえてそこは問題にしようとしていないのか、それとも、そもそも医者や膵臓の専門家が知っていることのほうが「正しい事実」なんて誰が言えるのか、といったことはここではあまり問題ではないだろう。

「君の膵臓を食べたい」というメッセージを支えている物語的な意味は、上記の内容を前提にするべきだ。なぜなら、この物語の世界を生きている桜良と「僕」にとっては膵臓とはそういう意味だからだ。

個人的に追加しておきたいと思う。膵臓という臓器の生物学的な最も大きな特徴は、それが、二種類の全く異なった組織からなっているということである。それは外分泌腺組織と内分泌腺組織と呼ばれている。

外分泌腺というのは、口から摂取した食べ物を消化するための膵液と呼ばれる消化液を産生し、消化管(具体的には十二指腸)へと送り出すという働きをしている。膵液の中には消化酵素という強力な消化物質が大量に含まれており、その量は一日に数リットルにも及ぶ。それによって、私たちが口から毎日大量に取り込んでいる食べ物の成分であるタンパク質、脂肪、炭水化物などを栄養素と呼ばれる人体の中で細



胞によって利用できるより単純な物質へと分解して、吸収することができるようにする。焼き肉やホルモン（動物の内臓という意味）などといった、脂肪とタンパク質の塊を、アミノ酸、脂肪酸、グリセリンといった単純な物質へと分解して吸収・利用できるのは膵臓の外分泌腺の働きのおかげである。

内分泌腺というのは、氏も育ちもこれとは全く異なった由来をもつ組織で、膵臓の外分泌腺組織の中に、星のように散らばったランゲルハンス氏島と呼ばれる小さな島状の細胞の塊として存在する。この細胞群はインスリンを始めとする複数のホルモンを産生しており、それらは血液中へと放出される。これらの複数のホルモンは、主として、ブドウ糖などの細胞レベルの栄養成分が細胞に取り込まれて利用されることを助けたり調節したりする働きをする。つまり人体において細胞レベルでのエネルギー代謝を調節している物質を作ることが内分泌組織の役割である。

外分泌腺から分泌される消化酵素が、消化管という「身体の“外”」に放出されるのとは違って、内分泌組織で作られ分泌されるホルモンは、血液中や細胞の中という「身体の“内”」で働く。

結論を急ぐと、膵臓という臓器は、それぞれが「内」と「外」に向かう、二つの全く異なったパーツが混在したものである。膵臓を肉眼で眺めると、この二つはほとんど区別することはできないほど混ざり合っている。しかし、よりミクロの目で見ると、それは全く

異なったものであり、働きも全く違う。しかし、最終的に人間というひとつの生物が生き延びていくためには、それらは協調して働いている。

奇妙なことに、膵臓という一つの臓器の中にある二つの存在について、医学は二種類の専門家を用意している。外分泌の専門家は、消化器病医の集団に属しており、外分泌組織に関連した病気である、膵臓癌や膵炎だけを扱う。内分泌の専門家は、内分泌・代謝疾患を専門とする医師の集団に属し、主に糖尿病の治療や研究を仕事にしている。しかし、膵臓は本来は一つの臓器であり、それは身体の最も奥の部分にひっそりと隠れるように存在している。膵臓で大量に毎日産生されている消化酵素は、生物の構成成分を消化することを目的に産生されるものであるから（つまり他の生物＝人間を含む）を分解して栄養素に変えてしまう働きをもつ。それは自分自身をも消化してしまう力を秘めている。だから、膵臓はその持ち主の死後すぐに自己消化されてしまい、その存在自体が消されてしまう。

このように膵臓は、二つの相容れないものを消化し、取り込み、代謝し、一つのものとして再生させるような働きを司るものとして、しかし、それ自体はほとんど知られないものとして、もっともふさわしい象徴となるのである。

<終わり>